

## 特別企画① フィールドワーク（「善光寺と被差別民」）

交流集会2日目の午後は希望者を対象に特別企画として「善光寺と被差別民」というテーマで講演とフィールドワークを開催する。

5月17日(日) 14:00~15:00 講演(事前説明)  
講師 井原今朝男さん(国立歴史民俗博物館総合研究大学院名誉教授)  
会場 JAアクティールホール  
15:00~17:00 フィールドワーク

※講演は参加自由です。

※フィールドワークは100人で締め切ります。県外からの参加者を優先します。

申込みが必要です。

※どちらも参加費は無料です。

善光寺は奈良・京都の大寺院のように天皇や貴族によって建立され有名な高僧が開基となっている寺とは異なり、平安末期頃から流布された「善光寺縁起」によって有名になって多くの人の信仰を集めてきた寺です。本尊で秘仏である「一光三尊の阿弥陀如来」は天竺・百済を経て伝来した日本最古の仏像で、生きた阿弥陀如来であり、善光寺はこの世の極楽浄土である、という信仰が広まりました。古代の国家仏教では救われないとされた女性や「悪人」も阿弥陀如来が救うとされ、極楽往生を願って様々な身分の老若男女が参詣に押しかけていたといわれており、そのなかには多様な被差別民もいたと考えられています。

さて、中世以来の善光寺と被差別民の関係を考えることは、現代のさまざまな差別の問題に向き合うこととなります。被差別部落の歴史と起源について、かつては「江戸時代に幕府が身分制度に対する不満をそらすために被差別身分をつくった」ということを中心に説明していましたが、この政治起源説について近年は否定的な見解が多くなりました。政治権力の方針だけで多くの人が差別したのか？誰がその身分にされたのか？などの疑問に明確にこたえられないからです。

考えてみれば、江戸時代以前から差別された人びとがあり、その一部は江戸時代の被差別民の集団に連続しています。中世以来、差別がある社会は人々の差別意識が支え、それが江戸時代まで連続し、再編成されて近世の身分制へ、そして現代まで続く差別へと変貌したのではないのでしょうか。

被差別民たちは善光寺という宗教的な空間に関係しながら、いささかの畏怖の念と共に施しの対象となって生きる道を選ばざるを得ませんでした。しかし、単純に寺に隷属したわけではなく、善光寺で施しを受けることを権利のように確保し、他方で境内の穢れを清める役を担い、また門前の「市」の管理にも携わりました。被差別民のなかには「癩者」としてのハンセン病や皮膚病の患者の集団もあり、門前から離れた場所に集住していたようです。ちょうど分科会会場の近くにあったと伝えられています。彼らは市の管理に関係していました。

参詣の善男善女からすれば、「穢れに触れる者」（「賤なる者」）。一方「穢れに触れることができる者」（「聖なる者」）でありました。

室町時代に描かれた善光寺絵伝に施しの場面があり、差別につながる意識は江戸時代以前からあったのだと考えられます。そのような差別的な関係は江戸時代を通じて存続し、明治4年には善光寺の役について解除されましたが、被差別民に対する差別はなくなりませんでした。その後集団の状況はそれぞれ異なり善光寺周辺から立ち去った人たちも多かったようです。

当日は講師の井原今朝男さんから中世・近世の善光寺と被差別民についてお話を聞き、当時の様子と人々の感覚をイメージしてからフィールドワークに出発します。多くの方のご参加をお待ちいたします。